

「乃木希典 ～腹を括ったリーダーの鑑」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 「武人」乃木希典の青年期

乃木希典(のぎまれすけ)将軍と言えば、東京の赤坂にある乃木神社のご祭神(さいじん)であり、乃木坂の由来にもなっているほどの国民的英雄として知られていますが、現在では、小説「坂の上の雲」などの影響によって、「無能」あるいは「愚将」といった、マイナスのイメージが定着してしまったような感があります。

乃木将軍が日露戦争における旅順(りょじゅん)での戦いで、数多くの死傷者を出してしまったことは事実ですが、その一方で、難攻不落の「永久要塞」とうたわれた旅順を、わずか半年足らずで落としたという「大偉業」を成し遂げたことを皆さんはご存知でしょうか。

戦いにおいて様々な悪条件が重なっても、一切弱音を吐かずに「腹を括(くく)った」乃木将軍であったからこそ、彼が率いた第三軍は勇敢に戦い抜き、また旅順攻略後に、敵将の名誉を重んじた乃木将軍の気高い精神が、世界各国から称賛されたという真実もあったのです。

今回の講座では、日露戦争における乃木将軍の活躍ぶりを中心に、彼が後世に遺した様々なエピソードや、それにまつわる教訓について詳しく探してみたいと思います。

乃木希典は、嘉永(かえい)2 (1849) 年旧暦11月11日（現在の太陽暦では12月25日、以後明治5年＝1872年までは基本的に旧暦を使用します）、長州藩の支藩である長府藩(ちょうふはん)の藩士であった乃木希次(のぎまれつぐ)と壽子(ひさこ)との三男として、江戸藩邸に生まれました。

兄二人が夭折(ようせつ)したため、嫡男(ちやくなん)として育った希典でしたが、自身も生誕時から身体が弱かったことから、父の希次は幼名を「無人(なきて)」と名付け、名前と反対の健全な子供に育てほしい、という願いを込めました。

しかし、幼年期の無人は依然として虚弱体質であり、かつ臆病でした。朝から晩まで泣くばかりだった無人の様子を見た人々は、彼は「無人」ではなく「泣人」だと陰口を叩きました。

我が子の将来を憂えた希次は、無人に対して、敢えて厳しく養育しました。ある寒い冬の日、無人が家の中で寒さを口にした際、希次は「暖かくしてやろう」と言って無人を褌(ふんどし)一つの裸にして井戸端に連れて行き、冷水を頭から何度もかぶせた後、乾布(かんぶ)で全身をぬぐいました。

こうした父の荒療治を受けながらも、持ち前の心根の優しい、素直な同情心の深い少年だった無人は、長府藩の上屋敷がかつて赤穂浪士の預かり場所であったこともあり、泉岳寺(せんがくじ)に何度も詣でるうちに、赤穂義士の忠義の精神を、知らず知らずのうちに理解するようになりました。

安政(あんせい)5 (1858) 年 11 月、父の希次が国元への帰国を命じられると、無人も同行して長府へ転居しました。文久(ぶんきゅう)2 (1862) 年、無人は 14 歳で元服して名を源三(げんぞう)と改めましたが、身体が未だに虚弱であった源三は、学問で身を立てようと決意し、親の反対を押し切って、乃木家の親戚であり父の親友、さらには吉田松陰(よしだしゅういん)の叔父でもあった、萩の玉木文之進(たまきぶんのしん)の下へと出奔(しゅっぽん)しました。

玉木は父の許しを得ずして出奔した源三を当初は許さなかったものの、やがては玉木家に住むことを許し、源三は畑仕事に明け暮れる毎日を過ごしました。農作業で鍛えられた源三の身体は、それまでの虚弱体質が嘘のように、別人のごとくたくましく成長したほか、後に玉木への入門が正式に許された源三は、約 4 年間真剣に学問に励み、剣術も一流となりました。

かくして、父の希次と、吉田松陰を育てた玉木の両人の薫陶(くんとう)を受けた源三は、心身共に立派な男子として成長を遂げ、慶応(けいおう)2 (1866) 年の第二次長州征伐の際には、長府藩報国隊の一員として小倉口で戦果を挙げました。なお、この時わずか 18 歳の源三の人物を見込んで、彼を指揮官として抜擢(ぼってき)した人物こそが、吉田松陰の愛弟子の一人である高杉晋作(たかすぎしんさく)だったのでした。

明治維新を迎えた後も、次々と出世を重ねた源三は、明治 4 (1871) 年 11 月に陸軍少佐に昇進しました。当時 22 歳の源三が少佐に任じられたのは異例の大抜擢であり、後に任官された日を「生涯で何よりも愉快的な日であった」と述懐しています。

なお、同年 12 月に正七位(しょうしちい)となった源三は、名を希典と改めています(これ以降、希典のことを原則として「乃木」と表記します)。

明治 8 (1875) 年 12 月、熊本鎮台歩兵第十四連隊長心得に任じられた乃木は小倉に赴任(ふにん)しました。なお「鎮台」は「師団」の前身であり、また「心得」が付いたのは、本来は中佐以上の軍職である連隊長に少佐が就任した場合、中佐に昇進するまではそう呼ばれたためです。

当時は明治政府が主導する急激な近代化が、従来の日本の伝統を粗末に扱うものであると考え、日本精神からの異議申し立てを考えていた不平士族による不穏な動きが見られており、明治 9 (1876) 年には熊本で神風連(しんぷうれん)の乱、福岡で秋月の乱、山口で萩の乱と立て続けに反乱が起きました。

これらの反乱に関しては、熊本や福岡の秋月、山口の萩を結ぶ要所であった小倉を任されていた乃木が、反乱軍の動きを事前に察知するなど、適切な対応を迅速に行ったこともあり、いずれも短期間で鎮圧することができました。

しかしその一方で、乃木は萩の乱で反乱軍に属して戦った、実弟で玉木文之進の養子となっていた玉木正誼(たまきまさよし)が戦死し、またその責めを負って、養父の玉木文之進が自害するという悲しみも背負っていたのです。

2. 連隊旗喪失の悲劇とその後の乃木

明治 10 (1877) 年 2 月に西南の役が始まり、西郷隆盛(さいごうたかもり)を首領とする薩摩軍が熊本城を包囲すると、乃木は主力を率いて小倉を出陣し、2 月 22 日の夜に熊本城から北約 10km に位置する植木という場所で、薩摩軍と遭遇しました。

倍以上の兵力を有する薩摩軍と激しい白兵戦を繰り広げながらも、良く持ちこたえた乃木は、頃合いを見て一時退却を決断しましたが、その際に、あろうことか明治天皇から下賜(かじ)された連隊旗を敵に奪われてしまいました。

連隊長としてあるまじき大失態に絶望した乃木は、もはや死をもってその大罪を償う他はないと言わんばかりに、敵の砲煙弾雨(ほうえんだんう)をものともしない奮闘ぶりを見せ、同年 4 月に官軍が薩摩軍の熊本城に対する包囲網を打ち砕くと、同月 22 日に乃木はその功績を称えられて中佐に昇進し、熊本鎮台参謀に任じられました。

連隊旗喪失の件も、西南の役の功績が評価されて無罪となった乃木でしたが、彼の心は暗く沈んでいました。そんなある日、彼はついに人知れず割腹自決を遂げようとしたのですが、同じ熊本鎮台参謀で、長州藩出身者として普段から親しかった児玉源太郎(こたまげんたろう)少佐が気付き、すんでのところで食い止めることに成功しました。

どうにか自決を止めることができた児玉は、乃木に向かって言いました。

「死ぬなら立派に死ぬ。しかし、貴様が腹を切ったら失った軍旗が出てくるとでもいうのか。もし仮に軍旗が出てきたとしても、その責任はそれで済むのか。武士が過失をしても、腹さえ切ればそれで責任が解除されるというのが、俺たちが学んだ武士道なのか。どうせ死ぬと決めたのなら、過失を償(つぐな)うだけの働きをしてからでも遅くはあるまい。ただ死ぬのは犬死だ」。

児玉の決死の説得を涙ながらに受け入れた乃木は、その場での自決を思い止まりましたが、自己の責任を痛感した彼は、後年に連隊旗喪失への謝罪を遺言の第一に挙げ、明治天皇の後を追って殉死を遂げることになるのです。

西南の役に従軍後、乃木は放蕩(ほうとう)生活を送ることもあったものの順調に出世を重ね、明治 13 (1880) 年には大佐、明治 18 (1885) 年には少将に昇進しましたが、その後は上司と反りが合わずに休職することもありました。

そして明治 27 (1894) 年に日清戦争が勃発すると、乃木は歩兵第一旅団長として出陣して遼東(りょうとう)半島に上陸し、清国にとって最重要の拠点であった旅順の要塞を、一万数千人の兵力によって、

わずか一日で陥落させました。

乃木は日清戦争終結直前の明治 28 (1895) 年 4 月に、軍功を称えられて陸軍中將に昇進しましたが、このときに旅順の要塞を一日で落としたことが、後の日露戦争で、彼に塗炭(とたん)の苦しみを味あわせることになるとは、当時の誰しもが予測もつかないことでした。

日清戦争後の明治 29 (1896) 年 10 月、乃木は新たに我が国の領土となった台湾に、三代目の総督として任じられました。乃木は当初、自分が純然たる軍人であり、政治的手腕を持たないことを理由にこれを固辞しましたが、統治が始まったばかりの台湾には武断的要素が不可欠であり、文武兼備の良将たる乃木こそが総督としてふさわしい、という期待を寄せられたこともあり、最終的に就任を決断しました。

妻の静子(しずこ)と母の壽子を伴って台湾に赴任した乃木は、程なくして母をマラリアで失うという悲劇に見舞われながらも、教育の向上を目指して教育勅語の漢文訳を作成したり、道路の建設や整備に力を入れたり、また役人の綱紀肅正(こうきしゅくせい、政治のあり方やそれにたずさわる政治家・役人の態度を正すこと)に努めたりするなど、台湾の治安確立のために力を尽くしました。

しかし、実直な乃木の姿勢が現地の官僚の反発を招き、翌明治 30 (1897) 年 11 月に、乃木は台湾総督を辞職しました。乃木の総督としての統治期間はわずか 1 年あまりでしたが、統治開始直後の難しい時期に「乃木のような実直かつ清廉(せいれん)な人物が総督になって、支配側の綱紀肅正を行ったことは、台湾人にとって良いことであつた」と評価する意見もあります。

台湾から帰国後、乃木は休職を挟んで明治 31 (1898) 年 10 月に、新設された第十一師団長に任じられました。大臣級の要職たる総督を歴任した後に、再び師団長に据えるというのは格下げ感が否めませんでした。乃木は全く気にせず、喜んで任地先の香川へと向かいました。

新たな師団長として赴任した乃木は、将兵を厳しく鍛えると同時に、深い慈愛をもって接しました。以下は明治 32 (1899) 年の夏のある日、炎天下で師団工兵隊が架橋演習を行っていた際のエピソードです。

訓練に従事していた兵士たちは、乃木が副官も連れずに一人で対岸の河原に立ち、こちらを見つめているのに気が付きました。やがて正午となって兵士らが弁当を食べると、乃木も携帯していた握り飯を食べ、兵士が河原に寝転んで休めば、乃木も同様に河原に横たわりました。

昼休み後に作業が再開されると、乃木は再び午前と同じ河原に立ち、夕方の作業が終わるまでその場を離れませんでした。兵士らは、乃木の行動を始めのうちは「監視しに来たのではないか」といぶかっていましたが、やがて「師団長は我々と困苦を共にしておられる」ことに気付き、感激せずにはいられなかったそうです。

こうした乃木の鍛錬が実り、第十一師団は全国の模範師団とうたわれるまでになると共に、所属していた将兵たちは日露戦争の際に第三軍に属して乃木の指揮下に入り、旅順攻略戦で奮闘を重ねる

ことになるのです。

ただし、乃木自身は、部下にある嫌疑がかけられたことをきっかけに師団長を辞任し、以後は休職の日々を送ることになりましたが、そんな乃木を優しく見守り続けられたのが、明治天皇でいらっしゃいました。

明治天皇が乃木の存在を認識なされたのは、皮肉にも乃木が連隊旗喪失事件を起こした後に、敵前をいとわず獅子奮迅(ししふんじん)の働きを見せていた頃でした。乃木の異常じみた行動が、やがて天皇のお耳に達すると、陛下は「乃木を殺してはならん」と前線指揮官の職から外すように命じられたとのことです。

その後も、明治天皇はことのほか乃木を親愛され、明治 35 (1902) 年 11 月に熊本で明治天皇が統監されて陸軍大演習が行われた際にも、乃木をお召(め)し列車に陪乗(ばいじょう)させ、西南の役の激戦地であった田原坂(たばるざか)を列車が通過すると、陛下は以下の御製(ぎょせい)を詠まれて「乃木に与えよ」と仰られました。

「もののふの 攻めたたかひし 田原坂 松も老木に なりにけるかな」

当時は西南の役から四半世紀の時が流れていましたが、それだけの長い間乃木と人生を共にしてきたというご感慨と同時に、老いてもなお忠義の臣として陛下に仕える乃木に対する愛情を込めて詠まれた御製でした。

その後、明治 37 (1904) 年に日露戦争が勃発すると、乃木は天皇ご自身が選ばれた親任官として第三軍司令官に任じられ、戦地に赴(おもむ)くことになったのです。

3. 旅順攻略戦の苦悩・前編

当時のロシアは軍事大国であり、我が国が戦って勝つという自信は、政府の首脳でさえ誰も持っていませんでした。しかしながら、ロシアの東アジアへの侵略をこのまま黙って見過ごしては、その魔の手が我が国にまで及ぶのは時間の問題でした。

独立を守るために、我が国はロシアに宣戦布告して日露戦争が始まりましたが、開戦前の日本陸軍は、満州でのロシア軍主力との早期決戦を想定しており、遼東半島の一大軍事拠点であった旅順の攻略はそれほど重要視していませんでした。

一方、日本海軍は旅順港を根拠地とするロシア太平洋艦隊を壊滅させたいと、ヨーロッパから回航してくるであろうバルチック艦隊との決戦を想定しており、その前提として、旅順を自力で陥落させる心積もりでした。

このため、海軍は陸軍に対して「旅順攻略への援助は不要である」と言い切っており、旅順港を攻撃しましたが上手くいかず、ロシアがバルチック艦隊の東航を公表したこともあり、旅順の太平洋艦隊

との合流を避ける意味でも、早期の旅順攻略を陸軍に要請しました。

しかし、海軍が旅順攻略を陸軍に正式に要請したのが、開戦から5ヵ月も経った7月であり、ロシア軍が旅順の要塞を強化する時間を十分に与えてしまったことが、その後の陸軍の旅順攻略戦を大いに苦しめる原因となってしまったのです。

海軍の動きをよそに、遼東半島を北上して進軍する第二軍の背後を脅(おびや)かされないうえにも、旅順攻略の必要性を感じていた陸軍は、海軍からの正式な要請が来る前から旅順攻略への準備を進め、乃木を司令官とする第三軍を編成して戦地へと向かわせました。なお、この間に乃木は明治37年6月に陸軍大将に昇進しています。

乃木が第三軍の司令官に選ばれた理由は、先述のように、日清戦争において乃木が旅順の要塞をわずか一日で攻略したからでした。そんな流れがあったからか、陸軍はロシアが守る旅順要塞も容易に落とせると錯覚し、敵の兵力を約15,000人と見積もったうえで、その約3倍となる約50,000人の兵力を第三軍に与えました。

しかし、それは児玉源太郎参謀次長(後に総参謀長に昇任)を始めとする、陸軍参謀本部の完全な誤解でした。1898(明治31)年に清国から租借して以来、ロシアが旅順の要塞工事に多大の労力を費やしたことで、旅順要塞は兵力約47,000人を誇る世界一の堅城と化し、いかなる敵を引き受けても「3年は支えることができる」という「永久要塞」となっていたのです。

そんな事情も知らず、乃木は旅順攻略の司令官として、ロシアとほぼ同じ数だけの兵数しか与えられずに現地で指揮をとることになりました。想像をはるかに超越した堅固な要塞と化した旅順を、バルチック艦隊が合流するまでに一日も早く攻略しなければならない。乃木率いる第三軍の苦難に満ちた死闘が始まろうとしていました。

6月下旬から旅順要塞の前進陣地の攻撃を開始した乃木率いる第三軍は、約1ヵ月かけて前哨戦(ぜんしょうせん)を制しましたが、その間だけでも、兵力全体の1割を超える約7,000人の死傷者を出しています。

そもそも要塞を攻略しようとするれば、攻撃側は守備側の少なくとも3倍以上の兵力を要する一方で、犠牲者は相手に倍するのが通常でした。陸軍参謀の情報不足から、結果的にロシア軍とほぼ同数の兵力しか与えられなかった第三軍の苦闘は、前哨戦からすでにその兆候を見せるという結果となったのです。

しかし、前途多難を思わせた前哨戦を制した第三軍は、兵力と火力の絶対的不足にもかかわらず意気軒昂(いきけんこう)でした。決死の覚悟で旅順に乗り込んだ乃木の「腹を括った」戦いぶりに、多くの兵士がロシアに対する闘志をみなぎらせ続けたからです。

旅順要塞の攻撃にあたり、第三軍は主として東北正面の攻略を進めました。このことに関して、東北正面は要塞の心臓部であり、防備が厳重であったことから、西北正面を攻略すべきであったとい

う批判が今日もなお絶えませんが、乃木が東北正面からの攻撃にこだわったのには大きな理由がありました。

もし西北正面を中心に攻めるとすれば、第三軍を西方に移動させなければならず、時間がかかるうえに、軍の背後が脅かされて挟み撃ちにあう危険性があったからです。一方、要塞の心臓部である東北正面に大きな打撃が与えられれば、速やかに旅順を攻略できるというメリットがありました。

第三軍は、海軍から「ロシアのバルチック艦隊が旅順の太平洋艦隊と合流する前に、一刻も早く旅順を落としてほしい」という要請を受けており、旅順の早期攻略は至上命令でもありましたから、日数のかかる西北正面の攻撃は、はじめから考慮されなかったのです。

さらに付け加えれば、東北正面への攻略は第三軍が独断で決めたのではなく、満州軍総司令部の大山巖(おおやまいわお)総司令官も、児玉総参謀長も全く異存がなく、そもそも参謀本部が旅順攻略について作戦を立てた当初においても、東北正面への攻撃を優先していたという事実も私たちは知るべきでしょう。

さて、先述のとおり旅順の早期攻略を要請されていた第三軍は、旅順要塞の総攻撃にあたり強襲法を採用し、8月19日から総攻撃を開始しました。

しかし、永久要塞を自称する旅順要塞の堅固さは、第三軍の度重なる砲撃にびくともせず、ロシア軍の守兵もほぼ無傷でした。第三軍は圧倒的なロシア軍の攻勢に苦しみながらも健闘を重ね、一時は重要な堡壘(ほゑい、土塁や石塁などを巡らした堅固な砦のこと)を2つ占領するなどの戦果を挙げましたが、無念にも砲弾が尽きてしまい、同月24日に乃木は攻撃を中止せざるを得ませんでした。

後に「第一次総攻撃」と呼ばれたこの戦いは敗北に終わり、第三軍は総兵力約50,000人のうち約16,000人という、3割以上の膨大(ぼうだい)な死傷者を出してしまいました。

さて、後年になって、第一次総攻撃の失敗は無能な突撃によるものとして、乃木が非難されることが多いようですが、そもそも海軍の遅すぎた攻撃要請が、ロシア軍による旅順の永久要塞化をもたらしたという事実があるうえに、事前に情報入手を怠(おこた)った陸軍参謀本部にこそ主因があるのではないのでしょうか。

ましてや、第三軍の兵力がロシア軍とほぼ同数であるという絶対的な兵力不足や、一時は堡壘を占領するなど奮戦していながら、攻撃を中止せざるを得なかったという砲弾不足もありましたし、さらに付け加えれば、当時の日本軍は知る由もなかったのですが、第一次総攻撃でロシア軍が受けた打撃も決して少なくなかったのです。

第一次総攻撃における、約一週間にも及んだ日本軍の犠牲をいとわぬ猛攻に、ロシア軍は大いに苦戦していました。事実、旅順開城後にロシア側の一将軍は、当時を振り返って「もし24日に日本側の増援部隊があれば、要塞を放棄していたかもしれない」と述べています。

つまり、第三軍に今少しの兵力と、あと数日分の砲弾があれば、旅順はこの時に陥落した可能性が高かったのです。第一次総攻撃自体は確かに第三軍の敗北に終わりましたが、その一方で、ロシア軍に精神的なものを含めた大きな打撃を確実に与えていたことを、私たちは忘れてはならないでしょう。

また、第一次総攻撃において、第三軍は約3割の死傷者を出しましたが、これだけの犠牲を出せば、通常であれば全軍が意気消沈し、壊滅しても決しておかしくはありません。しかし、軍の将兵たちは「次こそはきっと勝てる」と、大敗北を喫したにも関わらず意気軒昂でした。

最悪の環境や不利な条件の下でも決して希望を失わず、敗れてなお闘志を燃やし続けた第三軍を支えたのが、乃木という「腹を括った」司令官の存在であったことは言うまでもありません。

4. 旅順攻略戦の苦悩・中編

さて、第一次総攻撃において、第三軍は強襲法を採用しましたが、多数の犠牲者を出して失敗する結果に終わりました。このため、乃木は周囲の反対を押し切って、合理的な正攻法に切り替えました。

すなわち、敵の各堡塁に向かって塹壕(ざんごう、戦場にて歩兵が敵弾を避けるために作る防御施設のこと)を掘り進み、安全な攻撃路をつくって、堡塁の手前に突撃陣地を構築することで、攻撃距離を短くしようとしたのです。第一次総攻撃の尊い犠牲を決して無駄にはしないという、乃木ならではの柔軟な決断でした。

工事がある程度進んだ9月19日からは局地的攻撃を行い、約4,800人の死傷者を出しながらも重要な堡塁を占領するなど、第三軍は着実な成果を挙げると共に、旅順攻略に向けて自信を深めました。

かくして、10月26日から第三軍は第二次総攻撃を開始したのですが、その際にまたしても不利な条件で戦わねばならなかったのです。

第二次総攻撃に先立つ10月15日に、バルチック艦隊がついに本国を出発したことを受けて、海軍は陸軍に対して、旅順攻略の矢のような催促をしましたが、その意向はそのまま第三軍にも伝わりました。にもかかわらず、それならばと第三軍が要求した戦闘員や弾薬の補充は断られるという、極めて厳しい条件で総攻撃をかけなければなりませんでした。

第二次総攻撃において、第三軍は複数の堡塁の占領には成功したものの、最後には砲弾不足で攻撃を中止せざるを得ませんでした。またしても日本軍の敗北となったのです。

しかし、第二次総攻撃における日本軍の死傷者が約3,800人で、全体の1割を切ったのに対して、ロシア軍のそれは約4,500人と日本軍を上回ったほか、全体の割合も14%に達していました。

失敗したとはいえ、死傷者の数や割合が明らかに低下した裏には、乃木による正攻法への転換がありました。彼の判断は決して間違っていなかったのです。

ただし、兵数の消耗(しょうもう)が減ったとはいえ、二度の総攻撃をかけても旅順が落ちなかったという事実が変わりはなく、そのことが大きな失望を呼び、事情を知らない軍内外からは、乃木に対する非難の声が日増しに高まっていきました。

第三軍に対する非難は、ついに「乃木更迭(こうてつ)論」にまで達しました。しかし、天皇ご自身が選ばれた親任官であった乃木を辞めさせるには、明治天皇のご裁可が必要でした。このため、陸軍参謀総長の山県有朋(やまがたありとも)は、御前会議において第三軍司令官を交代させるべく、明治天皇にお伺いを立てましたが、陛下はただ一言仰られたのみでした。

「乃木を替えれば、乃木は生きてはおらぬぞ」。

第三軍の苦戦が続く最中であっても、明治天皇の乃木へのご信任はいささかも揺(ゆ)るぐことはなかったのです。

かくして、司令官の交代という事態は避けられたものの、乃木は一般の人々から辞めろ、腹を切れとの2,000を超える手紙で責めつけられたほか、東京の乃木邸は投石を受け、妻の静子が見ず知らずの軍人に面前で罵倒(ばとう)されるという有様でした。

海軍の攻撃要請の遅れや陸海軍の情報力不足、さらには戦力や弾薬不足など、旅順攻略が進まないことに対して、乃木一人にすべての責任をかぶせるには、あまりにも酷な条件がそろい過ぎていました。しかし、乃木は一切言い訳をせず、多くの犠牲者を出しながら旅順を落とせない責任を、一人で被(かぶ)る決意をしていました。

そんな乃木の悲壮な覚悟が、第三軍の士気に影響しないはずがありません。「乃木将軍は多数の犠牲者が出たことに苦しんでおられるのみならず、我々のことを本当に心配なさっておられる。将軍のためにも我々が頑張らなくてどうするというのだ」。

明治天皇のご慧眼(けいがん)どおり、第三軍は「乃木なればこそ」苦しい戦いをいとわず一丸となって奮戦し、また「乃木なればこそ」最終的に勝利をつかむことが可能となったのです。

5. 旅順攻略戦の苦悩・後編

第二次総攻撃の失敗後、バルチック艦隊の出航に焦った海軍は、要塞西北側にある二〇三高地を奪取することを主張し始めました。確かに二〇三高地を占領すれば旅順港内が丸見えですから、太平洋艦隊への攻撃も行いやすくなります。

しかし、二〇三高地を占領したとしても、旅順要塞の攻略には直結しないことから、満州軍総司令部の大山巖総司令官は要請を拒否しました。これに対し、参謀総長の山県有朋は、御前会議におけ

る決議まで行って総司令部に翻意させようとしたのですが、結果は同じでした。現場の状況を理解していたゆえに、乃木の苦衷(くちゆう)を察した総司令部は、あくまで正攻法による旅順要塞の攻略を目指していたのです。

そんな乃木に対して、明治天皇は11月22日に勅語を下されました。勅語を賜(たまわ)るという榮譽に感激した乃木は覚悟を決め、今度こそその思いを秘めて、11月26日に第三次総攻撃を開始しましたが、永久要塞とうたわれた旅順の攻略は、今回も困難を極めました。

各師団の攻撃がことごとく失敗に終わったことを知った乃木は、切り札であった「特別部隊」を投入する決断を迫られたのです。

乃木が切り札としてとっておいた特別部隊とは、各師団から選抜された約3,000人からなる奇襲部隊のことであり、総指揮官には中村覚(なかむらさとる)少将が任命され、全員が決死の覚悟で白礮(しろだすき)をしていたことから、白礮隊と呼ばれていました。

白礮隊の任務は、夜陰に乗じて刀や銃剣をもって敵陣に攻め込む奇襲であり、まさに命がけでした。乃木は白礮隊に訓示をした際、一人ひとりに「死んでくれ、死んでくれ」と滂沱(ぼうた)の涙を流しながら声をかけました。

白礮隊は26日の夜間に敵陣を奇襲し、攻撃は激烈を極めましたが、約2,000人の死傷者を出した末に敗れてしまいました。しかし、いかにも無謀と思われたこの奇襲は、ロシア軍に大きな恐怖と精神的な衝撃を与え、軍の士気に少なからぬ影響を与えたのです。

必勝を期したにもかかわらず、三度目の東北正面からの攻撃に失敗した乃木は、翌27日に攻撃を中止すると、攻撃目標を西正面の二〇三高地に切り替えました。なお、この時の乃木の決断が「遅すぎる」という意見がありますが、それは結果論しか見ていない早計であると言わざるを得ません。

そもそも東北正面への攻撃は乃木の独断ではなく、満州軍総司令部の総意でもありました。また失敗したとはいえ、三度にわたる総攻撃は、白礮隊の奮闘を含めてロシア軍に尋常ならざる衝撃を与えると共に、陸海軍による矢のような催促、加えて勅語を下されたほどの明治天皇のお苦しみを察しての、まさにギリギリのタイミングでの方針転換だったのです。

第三軍の二〇三高地への攻撃は熾烈(しれつ)を極めました。日露両軍が共に多大な犠牲を払いつつも一進一退の戦いが繰り広げられましたが、そんな折の12月1日、満州軍総司令部総参謀長の児玉源太郎大將が戦地を訪れました。

小説「坂の上の雲」などでは、「無能な乃木に代わった名将児玉の指導によって、初めて二〇三高地は占領できた」と記されているようですが、史実は全く異なります。

児玉が旅順に来た本当の理由は、旅順を軽視し入念な準備を怠り、わずかな戦力しか乃木に与えなかった参謀本部の責任を深く痛感していたからであり、もし自分の旅順行きが成功しなければ、生

きて帰らぬ覚悟をもって、遺書まで記して出てきたのです。また、児玉は第三軍の作戦や指揮について大きな指導をしておらず、二〇三高地の陥落と、児玉の旅順来訪とは全く無関係であることも忘れてはいけません。

さて、その後の戦いは、12月5日に第三軍が最後の攻撃を仕掛けると、困難の末に山頂の西南部と東北部一帯を占領し、翌6日にはついに二〇三高地の完全占領に成功しました。第三軍は直ちに観測所を設けて旅順港内に向かって砲撃を行い、太平洋艦隊を全滅させました。

かくして、第三軍はバルチック艦隊と太平洋艦隊との合流を阻止して、海軍の要請に応えるかたちとなりましたが、旅順要塞の攻略を成し遂げたわけではなく、さらなる苦難が第三軍を待ち受けると同時に、この時までには乃木が最愛の息子を失うという悲劇が訪れていたのです。

乃木の次男の保典(やすすけ)は第三軍に属していましたが、11月30日の二〇三高地の戦いで戦死しました。これより先に、長男の勝典(かつすけ)も5月に戦死しており、乃木家は後継者のすべてを失ったことになりました。

現代とは異なり、明治の頃は「家」の感覚が濃厚にあったことから、家系の断絶は当時の大問題でした。しかし、どうしてもなかったとはいえ多くの兵士を死なせてしまった乃木は、次男の死に対して、「よく戦死してくれた。これで世間に申し訳が立つ」と言い切るのみでした。

また、妻の静子も、自分が産んだ二人の息子の死を知って、「よく死んでくれました。これで世間の母親の方々に申し訳が立ちます」と言ったとされています。愛する子の戦死に対して、こう言わざるを得なかった乃木夫妻の心情を、私たちはどう思うべきでしょうか。

なお、乃木の二人の息子が戦死したことは、当時の多くの日本国民が大きな衝撃を受けると共に、乃木に深く同情するようになり、日露戦争後には「一人息子と泣いてはすまぬ 二人なくした方もある」という歌が流行しました。

さて、二〇三高地を占領できたとはいえ、旅順の要塞を攻略したわけではないことは先述したとおりですが、同時に海軍からの催促を受けることがなくなったことも意味していたことから、乃木はじっくり腰を据えて、東北正面からの攻撃に取りかかりました。

従来の作戦どおり正攻法での戦いで臨んだ第三軍は、ロシア軍の頑強な抵抗に多数の犠牲者を出しながらも進撃を重ね、翌明治38(1905)年1月1日には、東北正面の最後の砦であり、旅順市街地を見下ろせる望台を占領しました。

望台が敵の手に落ちたのを見極めたロシアのステッセル中將は抵抗をあきらめ、第三軍に対して降伏を申し入れました。かくして永久要塞と称えられ、攻略に3年はかかると言われていた難攻不落の旅順要塞を、乃木率いる第三軍は、わずか半年で陥落させるという大偉業を成し遂げたのです。

参謀本部の旅順軽視や、近代要塞戦についての認識および準備の欠如、海軍からの催促を始めとす

る時間的制約、二〇三高地を先に攻めよという作戦への干渉、さらには兵数と砲弾の不足など、旅順攻略に際してこれ以上はないと思われた最悪の条件をはね返した乃木は、果たして愚将なのでしょうか。もし彼が名将でないというのであれば、他の誰が名将たり得るのでしょうか。

さて、旅順陥落後の1月5日、水師営(すいしえい)において乃木とステッセルとの会見が行われました。後の世に名高い「水師営の会見」です。

会見に先立って、旅順攻略を深く喜ばれた明治天皇は、ステッセルが祖国のために力を尽くしたことを讃えると共に、武人としての名誉の確保を望まれるという聖旨(せいし、天皇のお考えのこと)を乃木に発せられました。

これを受けて、乃木はステッセル以下の将官に帯刀を許すなど名誉を重んじると共に、各国の従軍記者には、敵味方の優劣がつかない構図での撮影を許可しました。

こうした乃木の姿勢は、敗戦の将たるステッセルを感激させると共に、武人としての乃木の高潔な精神が、世界各国から絶賛されたのです。

なお、乃木とステッセルとの会見の様子は、後に文部省唱歌「水師営の会見」として歌い継がれ、長く国民に愛されました。

6. 奉天会戦、そして帰国後の乃木の決意

旅順要塞攻略後、乃木率いる第三軍は、ロシア軍との一大決戦となった明治38(1905)年3月の奉天会戦にも参加しました。第三軍は西から大きく回り込んで、ロシア軍の右翼を脅かすことを命じられ、そのとおりに猛進しましたが、このことがロシア側の作戦を大きく狂わせ、日本軍の勝利へと導くことになりました。

なぜなら、ロシア軍を指揮していたクロパトキンが、迫りくる日本軍が旅順の永久要塞を落とした乃木率いる第三軍であることに気付いて、恐怖に怯(おび)えたからです。乃木の存在を恐れるあまり、第三軍が日本軍の主力であると判断したクロパトキンは、約38,000人しかいなかった第三軍の兵力を、100,000人の大軍団と読み間違え、兵力の多くを乃木へと集中させました。

クロパトキンの思い違いによって、約3倍の大兵力との戦いを強いられた第三軍は、多数の死傷者を出しながらも持ちこたえた一方で、優勢を誇っていた東部および中央戦線から、第三軍への割り当てのためとはいえ、ロシア軍が退却したことが日本軍の追撃への呼び水となり、奉天会戦の大勢を決する転機へとつながったのです。

すなわち、「乃木の幻影」に恐れをなしたロシア軍が第三軍を集中攻撃したことが、奉天会戦を我が国の勝利へと導いたこととなります。また、この後に東郷平八郎(とうごうへいはちろう)率いる日本海軍の連合艦隊が、日本海海戦においてロシアのバルチック艦隊に完勝しますが、これも海軍の要請どおりに第三軍が旅順の太平洋艦隊を全滅させたことで、後顧の憂いなく連合艦隊が決戦に臨むこ

とができたという流れがありました。

奉天会戦や日本海海戦といった、陸海の一大決戦を陰で支えた乃木率いる第三軍が、日露戦争勝利の立役者であったという事実こそが、乃木が比類なき名将であったことを何よりも証明しているのではないのでしょうか。

日露戦争は我が国の勝利に終わり、乃木は明治 39 (1906) 年 1 月に帰国の途に就きましたが、国民の熱烈な歓迎を受けた一方で、その心は暗く沈んでいました。多くの将兵を死に追いやりながら、自分だけがおめおめと生き延びたことを深く恥じていたのです。

その後、明治天皇に拝謁(はいえつ)した乃木は、万感の思いを込めて復命書を読み上げると、自らの決意を陛下の御前で述べました。

「臣希典不肖にして、陛下の忠良なる将校士卒を多く旅順に失い申す。このうえはただ割腹して罪を陛下に謝し奉らん」。

明治天皇は無言でお聞きになっておられましたが、乃木が退出しようとすると呼び止められ、以下のように仰られました。

「卿(きょう、ここでは乃木のこと)が割腹して朕(ちん)に謝せんとすの衷情(ちゅうじょう、うそやいつわりのない本当の心)は、朕よくこれを知る。然(しか)れども今は卿の死すべきときにあらず。卿もし強(し)いて死せんとすれば、朕世を去りたる後にせよ」。

乃木は、陛下にとってかけがえのない多数の兵士の生命を、自分が奪ってしまったこと責任を取るために自刃すると述べましたが、明治天皇は、乃木の苦衷を察せられたうえで「今は死ぬべき時ではない。どうしても死ぬというのであれば自分が世を去った後にせよ」と諭(さと)されたのです。

陛下のお優しいご沙汰を、乃木は涙ながらに拝受しましたが、自分が犯した「大罪」を彼は終世忘れることはありませんでした。後に私用で長野を訪問した際に、師範学校に呼ばれた乃木は、校長のたつての願いで講演を求められたことがありました。

しかし、登壇をうながされても演壇には上がらなかった乃木は、その場に立ったままでこう言いました。

「諸君、私は諸君の兄弟を多く殺した乃木であります」。

この一言を口にした乃木はそのまま絶句し、両目からは止めどもなく涙があふれ出ました。そして、そんな乃木の様子を見た生徒や教師らも、共に涙を流したと伝えられています。

7. 晩年の乃木將軍と殉死

明治 40 (1907) 年、軍事参議官となっていた乃木に、明治天皇は学習院長という新たな役職を授けられました。武人たる乃木が華族の子弟を教育する由緒ある学校の責任者となったのには、乃木の人柄を見込まれた陛下が、三人の皇孫殿下の教育係として最もふさわしいとお考えになられたからでした。

翌明治 41 (1908) 年 4 月から、裕仁(ひろひと)親王殿下(後の昭和天皇)が学習院初等科へご入学されましたが、乃木は明治天皇のご期待に応え、裕仁親王に将来の天皇としての帝王学を厳格に教育すると共に、どんな小さなことでも大切だと思ふことは丁寧に教え、親王も素直にそれを守られました。

例えば、乃木は裕仁親王に普段から徒歩で通学されるように指導し、それ以降、親王は雨の日でも馬車に乗らずに、コートを着用されるなどして学校へと向かわれました。また、雪が降る寒い日であってもストーブにあたることなく、外に出て駆け回ることによって体を温めるようにも指導したそうです。

親王当時に院長閣下の乃木をお慕(した)いなされた昭和天皇は、後にご自身の人格形成に最も影響があった人物として、乃木の名を挙げておられます。

明治 45 (1912) 年 7 月 20 日、突如として明治天皇のご不例が発表されました。乃木は毎日参内してご容態を伺うと共に、心よりご快癒を祈ったほか、国民の多くも陛下のご平癒を願って続々と皇居に集まり、全国の神社や仏閣でご病氣平癒の祈願が行われました。

しかし、明治天皇は同年 7 月 30 日午前 0 時 43 分に、61 歳(満年齢 59 歳)で崩御(ほうぎょ)されました。陛下の崩御を知らされて絶望の底に叩き落された乃木は、殉死をする決意を固めました。

明治天皇の大喪の儀は大正元年 9 月 13 日に行われることになりましたが、その直前の 9 月 10 日、乃木は皇孫殿下に最後のご挨拶をしました。その際、乃木は裕仁親王に山鹿素行(やまがそこう)の名著である「中朝事実(ちゅうちょうじつ)」を差し上げ、素晴らしい本であるから熟読されるように勧めました。

いつもと違い、ただならぬ気配が漂(ただよ)う乃木の様子に、裕仁親王は「院長閣下(=乃木)はどこかへ行かれるのですか？」と聞かれたそうです。

9 月 12 日の夜、乃木は遺書と辞世を書きました。そして御大葬がしめやかに行われた 9 月 13 日、すべての身辺整理を終えた乃木は、御遺体を乗せた御霊輜(ごれいじ、霊柩車のこと)が静かに宮殿を出発する合図の号砲が打たれた午後 8 時過ぎに、自邸にて、妻の静子と共に先帝の後を追って自刃しました。享年 64 歳(満年齢 62 歳)でした。

乃木による妻を伴っての殉死は、当時の国民すべてに、途方もない衝撃と感銘を与えずにはおきま

せんでした。9月18日に青山斎場でとり行われた乃木夫妻の葬儀には、十数万の国民が自発的に参列するなど、かつてない国民葬となりました。

乃木の殉死を受け、国民を主体として様々な動きが見られるようになりました。東京・赤坂の乃木邸には多くの国民がこぞって訪れ、付近の坂の名前も「乃木坂」と改められました。

やがて当時の東京市長が中心となって、乃木を敬慕する人々による中央乃木会が設立されると、大正8(1919)年には乃木神社創立の許可がくだり、翌大正9(1920)年に明治天皇と昭憲皇太后(しょうけんこうたいごう)とお祀(まつ)りする明治神宮が創建された後に造営の事業が起こされ、大正12(1923)年11月1日に鎮座祭が行われました。

乃木将軍が我が国に遺した数々の実績は、多くの国民を感動に包むと共に、ご祭神として今もなお国民の心に生き続けているのです。

戦前において、乃木将軍は国民の誰もが知っている偉人であり、英雄でした。しかし、戦後に入ると、乃木の名が学校の教科書から削られたばかりか、小説「坂の上の雲」などが唱えた「乃木無能論」や「乃木愚将論」があたかも真実のように大手を振ってまかり通っている有様です。

しかし、それが大きな間違いであることは、今回の講座を通じてご紹介したとおりであり、日本海軍勝利の立役者である東郷平八郎と共に、乃木将軍は国軍を代表する名将として、子々孫々にまで語り継がれるべき民族の代表的英雄の一人なのです。

思えば、乃木将軍の生涯はまさに劇的なものでした。連隊旗の喪失や多くの将兵を死なせたこと、あるいは二人の息子を戦死させたことなど数々の苦難もありました。しかし、そんな中にあっても、「腹を括った」指揮官として日露戦争を勝利に導くなど、将軍が遺した数々の実績は、単なる数字だけでは到底語りつくせない大きな「精神的支柱」として、私たち日本国民を励まし続けているのです。

戦後から70年以上が経過しましたが、混迷した世が続く今だからこそ、乃木将軍のような国民的英雄の生涯を振り返ることによって、我が国の歴史と伝統に誇りを持つと共に、日本民族の自信を私たちの手に取り戻すべきではないでしょうか。(完)

主要参考文献：「乃木希典 高貴なる明治」(著者：岡田幹彦 出版：PHP 研究所)
「日本の歴史5 明治篇」(著者：渡部昇一 出版：ワック)
「歴史街道 2013年1月号」(出版：PHP 研究所)

YouTube 再生リスト「乃木希典」

https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML72lmnO0eHDA2elRBJ8_GXM

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>